人とのふれあいに必要なこと

廣山　敦紀

僕の兄は生まれつきの心臓病があり、障害者の認定を受けている。兄の病気は十万人に一人の確率でなる難しい病気だそうだ。でも見た目はふつうの高校生でゲームが好きで勉強はキライで運動がニガテ。僕とあまり変わらない。言われなければ障害と分からない。だから今までであまり気にしたことがなかった。でも病気があると感じることもある。毎日たくさんの薬をのんでいて、その薬の中には血液の流れをよくするものが入っている。水泳やマラソンなどの一部の運動は心臓に負担がかかるのでドクターストップになっている。3ケ月に一度病院へ定期検診に行ったり、何度か入院もしている。

兄に病気があって困ることは何かあるのかと聞いてみたところ、「病気で困ることは特に無いけれど、みんなと一緒に走れないことはちょっといやかな。」と話していた。運動が

20 × 20

ニガテな僕からするとマラソンを走らなくていいのはうらやましいと思っていたけれど、まわりと同じことができないということはてもさびしいことかもしれないなと思った。

次に、人からしてもらったらうれしいことは何かをきくと、「やさしくしてもらうこと。」と言っていた。障害のない僕も、人からやさしくされたらとてもうれしいし、それはどんな人でもうれしいことだと思った。これらの質問をして、僕とあまり変わらないんだなと思った。そして気が付いたことがある。それは、できることやできないこと、注意しなければいけないことなどは、障害がある、ないに関係なくみんなあるということ。もちろん障害のある人のほうが生きていくうえで大変なことが多いのはまちがいないけれど、ふつうの人でも必ずあるということだ。兄は心臓に負担がかかる運動ができないし、疲れやすいので、体育は注意しなければならない。僕は障害者ではないけれどぜんそくになりや

20 × 20

すいから体育を注意しなければならない。障害者じゃない人が何でもできるかというとそうじゃなく、僕も友達に「大丈夫？」と言われるとうれしい。

障害者でもそうでなくてもお互いのふれあいの中で「相手を知る」ことがとても重要だと思う。「障害」といっても見た目で分かるものばかりではわからない障害もあれば、兄のように見ただけでは分からない障害もある。いろいろな種類の障害があり、一人一人状態もちがう。僕がこれから、人とふれあうとき、相手が障害者でもそうでなくても、自分のことを伝えて分かってもらうように相手の話をきくようにしたい。お互いに必要としていることが分かるようになると良いと思うので、相手を知ることからがんばりたいと思う。

20 × 20